

森岡貞香百首

藤井忠 選



森岡貞香

うしろより母を締めつつあまゆる汝は執拗にしてわが髪乱るる

拒みがたきわが少年の愛のしぐさ顔に手觸り來その父のこと

天井を打ちつつ狂ふ蛾の翅音くらがりに寝てがんじがらめなり

生ける蛾をこめて捨てたる紙つぶて花の形に朝ひらきをり

われのもつ假面のひとつあばき出し白蛾くるしみにそりかへりつつ

月させば梅樹は黒きひびわれとなりてくひこむものか空間に

月のひかりの無臭なるにぞわがこころ牙のかちあふことくさみしき

片頬は月が視る故削げてをらむまたおもふわれの翳なる片面

食鹽と塩とかち合ひ光りたりああ瞬間そこに夫が居ぬ

『白蛾』

つくづくと小動物なり子のいやがる耳のうしろなど洗ひてやれば

月のひかりにのどを濡めしてをりしかば人間とはほそながき管のごとかり

雨に打たれたたずむ黒き傘の内わが身ひとたびは深淵に沈みぬ

流弾のごとくしわれが生きゆくに撃ちあたる人間を考へてゐる

夫の骨收めし墓の石室など毀ちたし骨は上に還るべきなり

胸切りて泣き得る肺量を持たざりき悲しくなればまなこみはりき

ジェット機の金属音かすめわれがもし尖塔ならば折れたかも知れぬ

ねむらんととき月光は壁の絵の中に来てをりひと房の葡萄がありぬ

公園の蛇口のしたたりも平凡となるまでをりぬこころやすらふ

『未知』

わが肩に重くくもりの垂れてきてふとあふのけの金魚をりたり

白旗と思ふまでシートはためけり空しきころ裏庭に來ぬ

空墾げんにななめに通る傷あれば捨てむとしつつ危ぶみてゐる

きつちりと手袋はめしわがまへに胴黒き電柱立ちてゐたりき

莖くたる蟻おびただし高きダリヤ暑きこの日に悲歎をせらる

ましろき懸崖けんがいをかかへ入れしとき内奥暗し菊波打てり

どくだみを抜きし一隅の土臭ふその鮮しきにころ葬りき

豹ひょうの目をしてをると母を言ひしとき巷にあひし少年か汝は

夕映をせぬ窓を見ておどろきぬ硝子びやうし失くししその空あき跡の

編みて寝る垂髪に棒の感じあり息づくときにわれはせばまる

垂直のさみしきに似ぬ早婚にてみじかき同棲にてわれが産みにき

昼の道にタール煮立ちてをる辛さとどこほりつつ恋ひつるたり

何を見むとしてひびわれし堀の底ひを恃たも越えて見る

さみしき眼われは漂ふじやがいの青の飛ぶとき空隙ありき

瑠璃いろのみづは沼といふ水の居りけり変身絶えまなき雲も

石畳壊れて消えん顔の向き変へしばかりにちひさき崩壊は

ふきぶりの重たき傘に身を屈むよみがへりつつ電話とほく鳴る

夜の胡同は息のごときしろき聲こゑあゆめれば歩みくるは翳かげ濃きむかしか

大運河に沿ひつつ夜行すわが少年の父の受弾地は黒きふくらみ

ぼろぼろになるまで地図を見き戦争のあはひに産みにき愛恋なりしや

わが父の瞳空きたり娘われ空きしところを過ぎたりきちちよ

沙魚さぎが目を目をみはり手許に上り来とちちは言ひにき死ななんととして

缺刻に似し愛恋がわれのものか胸処に黒く豆の木は充ち

硬き顔断乎たる他者のわがなかにいつより棲みてわれは哀ふ

どくだみの族とも土ともならぬ死のもろごゑひそみわが夜の庭

何事の起らむとして隘路がいりょの実にうつしく空あきたるときよ

ふる雪に光りふるひるるまんじゆしやげそれはあそびに遠きひとむら

ふりみだれ雪のふるなり幽明に乳房のかなしみ宿るがごとく

すぎし人すぎし日網羅して雪ぞふる けふきさくらぎのすゑつかた

陰立ちの美しきなり明けとなりてさまよへる樹は樹の中に入りし

並木みち飛白のごとき風見えて若死のごと問はむとおもふ

昼ふけて人さまさまにある車中われは珊瑚の数珠をたづさふ

〔整〕

〔珊瑚数珠〕

今日もむかし夏のゆふべに倒れゐる空罐に雨がやきてふる

桃のけば桃のまはりにただよひてぬはたまの夜に入らむとする

桶ひとつ庭に置きたる父死にて笑ひの顔のしろく曝されたり

一時の紙のかがよひ歌反古を焼きて終ればいづべかは空く

ここにゐて死ぬまで遊べかなふんのぶるぶるとゐるに糸をつなげり

すきとほり垂れかかりたる赤き実は冷たく滑るか鳥のみとを

ゆふまぐれ二階へ上る文色なきところを若しかして雁わたる

いとふるき巨石坐る草丘に産卵狂ほしきなり白の蝶

炎上せる家ゆ走りいづる罪ふかき影のごときわれまぬがれず

何をか思ひ出し切れずうねりとびしてこし尾長鳥のこゑさわがしき

遺されし函囊のなかの色鉛筆 百日紅の花の色あり

「黛樹」

おどろきて見ぬ青き棗の快活なる揺れやうは あなたであらむか

日常に変化のありこそひかがみの肉厚くなりてきたりてあはれ

内面を無になしてねむりたくそをいぬきはのくるしみとせる

牢愁とはこのやうにありわが下半身石膏繻縹の冷たく硬く

空晴れて近づく夜は見えざるに甲蟲の飛ぶいたくさみしく

さみしきにこのなまめきは食うべける鯉の香り顔の辺りを去らず

蹠の甘美なる血流により水の上を走り空へ行きけり

青き空にさくらの咲きて泣きこゑは過ぎし時間のなかよりきこゆ

椅子に居てまどろめるまを何も見ず覚めてのちに厨に出でぬ

ヤチダモの林のなかにてわが母は面輪を奥にむけるしとおもふ

悲哀はとほく厨の卓の向う小さき壁に塩満ちてゐる

晴れし日のつめたき戸口に近づきてゆくときありき記憶といふは

今夜とて神田川渡りて橋の下は流れてをると気付きて過ぎぬ

「百乳文」

朽ちし葉に乗りて日さしを浴みにたる一刹那ありきセセリの蝶に

逸樂の肉にこもれる黄昏の色もの憂しとぞ書きのこしたる

きのふまたけふ厨の方へ行かむとし尻尾のごときを曳きてをりけり

わが庭のかへで紅葉にありつるを近所の道のそこを飛ぶ

母の住む離れの庭に日の差して母屋より同じき中庭の見ゆ

圓筒のごときのかげのありありと山鳩啼けりこのゆふまぐれ

散るといふことにて上に行くさまの急くと遅きのありて秋の黄葉

ひきだしを引くと引けざりすぐそばに隠れて見えぬものにくるしむ

たとへていはば守勢にあらむ一部屋をかくも片付けたるきのふけふ

夏の日はずつひに終らずも秋へゆくことしの夏日をはりとなしぬ

椅子ひとつ餘分に置きけりこのへやに餘分のたれも居らざる日目を

をみな古りて自在の感は夜のそらの藍青に手ののびて嗟なげかな

けれども、と言ひきしてわがいくばくか空閒のごときを得たりき

彼はたれかカナカナといふそのこゑを亡き敷のなかに入れてかぞへよ

この先へ行く時間なき旅の日に消えつし白き芒かがやく

受話器より暗き葉むらのうごくことありにし言の葉われをかこむか

さしのふる枝数々もあるやうなるわが部屋にわがしりぞきをりき

(最近作より)

よわよわしく時過ぎゆきし卓上に肘をつきぬし跡の照り出づ

此方向く人の居りつつ中庭がふるきむかしの部屋のごとしも

料まといふ女は母にてしなのきのもとに目の眩むまで顔をあげぬし

てーぶるにのこしてありしパンの耳のうごきをりたりまひるまの夢

感冒の熱のもたらしし占りし時間 人のわれをよぶふるき日ち日ち

白粥に蓮の実浮きゐるその食をわが身に入れぬ忘はも徒らに

おもひこしことも捨つればかおほろかに弱者のゆとりのごとき味はひも

庭の木の木股おのおのに液化しゆくけはひのありつ夜に入るまでを

いろ湛ふる淵に沈むやうによそゆきの着物のなかに入りぬうつしみ

歌の表記・ふり仮名は原則として歌集に準拠しています。

森岡貞香のエッセイ(一九七〇年)に次のような文があります。

「或るうたが、卓越した比喻をみせる時それは言葉の組合せ、構築した作業の結果だと人らは言うかもしれないが、事実の一見して等しくないものを結ぶのは、私だったら、事実に触発されて内部のあの奇妙な同居をのぞき見たことから始まりそうに思える。そうであつてみればその喩は当人にとっては内部告白にすぎないということになる。が、それにも喩を見られるとしたらそれは言い換えれば、私性から拡大された訴えをもつということに通じ

てくるのであろうと思う。第三者には通用しない筈の自分の内側の同居には自身で心惹かれることである。」内部のあの奇妙な同居とは、「自身さえうかがい知れないようなところ」の、異質なものの同居をいいます。ゆつたりとした屈曲をふくむ独特の自己観察——かつて「われがもし尖塔ならば」と歌い、またのちに、「圓筒のごときのかげ」を夕空に立ちのぼらせもするこの作者ゆえに一層興味深くおもわれて、ここにあげることにしました。

藤井 忠(ふじい・ただし)「石疊」(会員)